



「感動価値をひろめよう」というミッションから、様々な“ヒト”の『感動』を取材し、皆さまにお届けするシリーズ企画『あなたのところをうごかす、おしえてください』の第15回目です。

今回は、映画監督でプロデューサーの遠山昇司（とおやま しょうじ）さんです。映画製作やアートプロジェクトを、「情報の再編集作業」と称して誰もが思いつかない独特の切り口とアイディアでプロデュースする遠山監督のお話し、どうぞお楽しみください！

遠山 昇司（とおやま しょうじ）

映画監督／プロデューサー

1984年 熊本県八代市生まれ。

東京在住。

法政大学国際文化学部卒業。

ボストン大学留学。

早稲田大学大学院国際情報通信研究科修士課程修了。

【プロフィール】

大学時代からドキュメンタリー映画、舞台作品を制作。

ドキュメンタリー映画『グレーのバリエーション』を劇場公開(2009年)。

2012年、熊本・天草を舞台に撮影された初の長編フィクション映画『NOTLONG, AT NIGHT -夜はながくない-』がアジア最大級の国際映画祭、第25回東京国際映画祭<日本映画ある視点部門>に正式出品され、高い評価を得る。同年、一般公開。

2013年6月にスタートしたアートプロジェクト『赤崎水曜日郵便局』では、ディレクター・局長を務め、熊本県津奈木町にある海に浮かぶ旧赤崎小学校を再利用した本プロジェクトは全国で話題となる。同プロジェクトは2014年度グッドデザイン賞を受賞。

熊本・東京を舞台に撮影された長編映画『マジックユートピア』(共同監督:丹修一)が2015年7月に完成。同作品は第15回アンカレッジ国際映画祭コンペティション部門、第49回ヒューストン国際映画祭コンペティション部門にて審査員特別賞を受賞。

最新作短編映画『冬の蝶』は若手監督の登竜門として知られている第33回テヘラン国際短編映画祭アジア・コンペティション部門にてグランプリを受賞するなど海外でも高い評価を得ている。

精力的に映画制作を行いながら、舞台作品・エキシビション・アートプロジェクトなどの企画プロデュースを手がけながら現在に至る。

【FILMOGRAPHY & AWARD】

ドキュメンタリー映画『グレーのバリエーション』(2009)

監督/編集/プロデューサー

映画『NOT LONG, AT NIGHT -夜はながくない-』(2012)

監督/脚本/編集/プロデューサー

第25回東京国際映画祭 <日本映画・ある視点部門> 正式出品

映画『マジックユートピア』(2015)

監督/脚本/プロデューサー 共同監督:丹修一

第15回アンカレッジ国際映画祭 長編コンペティション部門 審査員特別賞受賞

第49回ヒューストン国際映画祭 長編コンペティション部門 審査員特別賞受賞

短編映画『冬の蝶』(2016) 監督/脚本/編集

第33回テヘラン国際短編映画祭 アジア・コンペティション部門 グランプリ受賞

第68回モンテカティーニ国際短編映画祭 インターナショナル・コンペティション部門

スペシャルメンション受賞

アートプロジェクト『赤崎水曜日郵便局』(2013-2016) 局長/ディレクター

2014年度グッドデザイン賞受賞

“情報の再編集”から生まれた 映画・アートプロジェクトが 日本中に新たな希望の灯をともし



自身初の短編作品で、第33回テヘラン国際短編映画祭
グランプリ、モンテカティーニ国際短編映画祭スペシャ
ルメンションを受賞

-----「冬の蝶(※1)」は、数々の国際映画祭で賞に輝きました。
この作品に込められた監督の想いをお聞かせください。

僕は出身が熊本の八代っていう所なんです。僕はこれまで劇映画を3本公開してきましたけど、すべて基本的には自分の故郷の熊本で撮影し続けています。最新作の「冬の蝶」は初めて撮った短編です。僕が生まれた八代に秘境といわれる「五家荘」という場所があるんですね。ここは平家の落人が逃げ込んだといわれるぐらいとんでもない秘境で、同じ八代市内なのに街中から行くのに3時間ちょっとかかる。そこに小さい頃に親に連れて行ってもらって、紅葉がすごくきれいだったという思い出がありまして。同じ熊本県内なのに全然別世界がある、という印象が僕の中にずっとあって、いつかそこで映画を撮りたいと思っていたことから、最新作ではまず舞台を「五家荘」に決めました。僕の映画の場合、作品はすべて場所から始まるんです。これはアートプロジェクトでも一緒なんですけど、その場所の魅力とか、そこに残っている物語などから脚本やストーリーを書いています。

僕らがこの村に入ったときに、蝶の文様がトンネルに埋め込んであって、これは何なのかな？と思って聞いたら、実は平家の人達が逃げ込んだ後に自分達で独自で作った家紋なんだと教わりました。「何で蝶なんだろう」と思って調べてみると、五家荘はとても希少価値の高い蝶が生息する地であることがわかるんです。昔から珍しい蝶がいたんでしょうね。だから平家の人達もそれを家紋にした。ちょっと現実と非現実が入り交ざったような不思議な場所なんです。そういうところに惹かれて、その地を何度も訪れる中で脚本を書いていきました。

「冬の蝶」には僕の作品の中では初めて社会的なテーマを入れたんです。映画では主人公とおばあちゃんとの関係性を描いていくんですけど、おばあちゃんが認知症なんですね。おばあちゃんがいきなり主人公である孫に電話をしてくるんです。「蝶がいた」と。冬になってそんなことあり得ないわけですよ。主人公も最初は認知症が言わせていることだと思ったんだけど、実際にそれが現象として起こっていくという。つまり何が真実で何が虚構かというのが実はあいまいになりながら、生きることと死ぬことを描いた作品になっています。

※1 冬の蝶 <http://winters-butterfly.com/>



テヘラン国際短編映画祭受賞



モンテカティーニ国際短編映画祭受賞



----- 映画との関わりや、映画監督になったきっかけを教えてください。

父が映画好きだったので、僕は小さい頃から家で映画を見る機会が多かったんです。僕の町には映画館がなかったんですよね。映画を観に行くにはちょっと大きい街、熊本市内まで出なきゃならなかったの、そんなにしょっちゅう観に行けてなくて。ただ父がレンタルビデオで映画を借りてくるのをいっぱい見ていました。外国の映画ばかりでしたね。自分が行ったことのない風景が見えて、こんな世界があるんだな、外国ではこんなものを食べてるんだな、と思いながら観ていました。僕の実家は田んぼしかないような所ですけど、そこに居ながらも遠い外国にジャンプできるというか、それが楽しかったですね。そこから映画に嵌まっていきました。



文化情報学を専攻し、 映画・アートへの独自のアプローチ方法が生まれる

----- アートに興味をもたれたのは、いつ頃からですか？

僕は、東京藝術大学を受験してるんですよ。でも、落ちるんです。藝大に行こうとしたきっかけは、僕のいた八代に博物館がひとつだけあって、高校2年の時に、そこにアンリ・カルティエ・ブレッソンという世界屈指の写真家の作品展が来たんです。それをたまたま美術の授業で観に行ったら、それが僕がアートに関心を持ったきっかけです。それまではアートなんて全然考えたことなかったんですけど、その写真作品を見たときに、これはすごい！と思って。でも田舎でアートに関心を持っても本屋さんに置いてある本なんて限られていて、たまたま手に取ったのが美術手帳。ちょうど会田誠という現代美術家がフューチャーされていた頃で、「何だ、これは！？」って。カルチャーショックというか、びっくりしたんですよね。

そこから興味を持ち始めて、特に現代美術、厳密にいうとメディアアートですね、それに興味を持って藝大の先端芸術学部を受けるんです。現代アートが好きでありながらも、映画もずっと観ていました。そのふたつが並びながら僕の高校時代を形づくるんです。当時は、僕自身たくさん絵も描いていましたし、インスタレーション作品みたいなのも作ってました。ビデオアートみたいな、今考えれば恥ずかしいようなこともやっていました。

その後、藝大の先端芸術学部を落ちて、たまたま受けた法政大学に進むことになります。大学で僕は頭を180度切り替えて、文化情報学という情報をデザインしたりアーカイブしたりすることに特化して勉強してたんですね。そこが僕の人生の中で大きな分かれ道となりました。僕はアートがもちろん好きで生きて来たんですけど、一番の専門は情報なんです。情報をどうデザインしたりアーカイブして行くか、というのが僕の最も強い専門領域になっていくんですね。



----- 映画、舞台作品、エキシビション、アートプロジェクトと幅広く活躍されていますが、ご自身にとって映画とは、またアートプロジェクトとは何でしょうか？

僕にとっては映画もアートプロジェクトも境界がほとんどなくて、演出方法や制作方法はほぼ一緒で、それがちょっとへんてこなアートプロジェクトとして表出してくるというか。もともと情報が僕の専門でしたから、映画が好きだとか、美しい映画を撮るとか、そういう監督としての興味はもちろんありますが、それも情報をどう編集して行くかという作業なんです。だからアートプロジェクトも一貫していて、どうやって情報を整理して再構築して行くかということなんですよ。

僕にとっては映画もその土地にある情報なんです。こういう歴史的背景があって、ここにはこういう物語がある。そしてどういう役者がそこに介入してきてというのを、総合的に編集して行く。赤崎水曜日郵便局(※2)だって、僕は何も作ってないんですよ。建物はそこにあったんです。そこから住所に目をつけただけです。

住所というものを僕はメディアとして捉えたんですよ。そこにある情報、それをどうリデザインしていくか、編集していくかというプロジェクトなんですよ。それによって水曜日だけ開局して水曜日の循環を生み出す、という発想にたどり着いているんです。そういうふうに映画もアートプロジェクトも、一貫して情報のデザインというか、再編集みたいなことをやってきます。

※2 赤崎水曜日郵便局

海に浮かぶ赤崎水曜日郵便局に自身の水曜日の物語を送ると、知らない誰かの水曜日の物語が送られてくる、アートプロジェクト。 <http://www.akasaki-wed-post.jp/>



美術館の廃校利用プロジェクトから始まった 「水曜日だけ開く郵便局」



----- ディレクターとして関わられた「赤崎水曜日郵便局」ですが、このプロジェクトとの出会いや開局の経緯をお聞かせください。

舞台が熊本ですね。水俣の隣に津奈木町という人口5,000人ぐらいの小さな町があるんですけど、そこには町営の美術館、「つなぎ美術館」があります。

2012年に初公開した「NOT LONG, AT NIGHT -- 夜はながくない --」という映画をクランクインした場所が、旧赤崎小学校なんです。

当時、その海に浮かぶ小学校を紹介してコーディネートしたのが、つなぎ美術館の学芸員の楠本さん。その後彼は、赤崎水曜日郵便局の管理人になるんですけど、彼との出会いがまずあるんですね。「この小学校、面白いですね」みたいな話をしていたら、「映画のロケ地として使えますよ!」ってことだったので僕は使ったんです。

僕の映画は、既存の映画の作り方じゃなく、アーティストもクリエイターもごちゃまぜになって作っています。そのことに楠本さんが学芸員として興味を持ってくれて、後に津奈木美術館で僕の映画の展覧会をしてくれました。



つなぎ美術館ではずっと、住民参加型プロジェクトという、津奈木町の住民と招へいされた作家によって何かプロジェクトをやって行くということに取り組んでいたんですけど、このご縁で僕が翌年の招へい作家に選ばれるんです。そして、「廃校になった赤崎小学校を使って、後々まで記憶や思い出に残るようなことを何かやって欲しい」というオーダーがあったので、お受けしたんです。最初は芸術祭をやろうと思ったんですよ。2011年のことです。

当時、九州では別府で混浴温泉世界というのが開催されていた。それを視察に行ったときに、芸術祭は九州にはこれがあればいいや、と正直思ったんですよ。芸術祭はこれから乱立するだろうと僕は予感していて、だったら何か違うことをやろうと思いました。なおかつ町からのオーダーが、「あの建物を再活用して欲しい」、と同時に「建物には入れない」だったんです。老朽化で耐震構造に問題があって、入れない。中には入れないけど、再活用しなければいけないという難題だったんです。そこでまず僕は、アーティストの五十嵐靖晃(※3)氏を呼ぶんですね。とりあえずファシリテーター的なポジションとして参加して欲しいということで、まずキャスティングしました。それで彼と二人で赤崎の町に泊まっていろいろ考えました。そして僕らが注目したのが、あそこの住所でした。

あしきたぐん つなぎまち

「熊本県葦北郡津奈木町福浜165番地その先」。まさに土地がもうないんですから、建物の住所自体が「その先」になっちゃってるんです。こりゃ面白いって話になり、住所を使うプロジェクトなら郵便じゃないのって話になって。それから、水曜日だけ開局する郵便局はどうかねという話で盛り上がり、一晩で決まったんです。実はその時僕らには一晩しか考える時間が与えられてなくて、次の朝にはもう企画を立ててくれっていうんで(笑)。それで、翌朝にその楠本さんにお会いして、「赤崎水曜日郵便局っていう水曜日だけ開局する郵便局なんですけど、どうですかね?!」って。楠本さんが、「そりゃ面白い!」ってことで物語が進んで行った。

だから最初に住所ありき、それも場所なんですよ。我々が注目したのはまさに場所。それをメディアとして捉え直したんです。



海に浮かぶ旧赤崎小学校(中央左)



※3 五十嵐靖晃

アーティスト。その土地の日常に入り込み、新たな視点と人のつながりを見いだすプロジェクトを各地で手がける。代表的なプロジェクトとして、福岡県太宰府天満宮での「くすかき」や、漁網を空に向かって編み上げ風景をつかまえる「そらあみ」などを行う。(本連載の第9回に登場)

-----「その先」とは、遠山さんが脚本として書かれたんじゃないかと思うくらい、いい住所ですね。

ぴったりはまってますよね。ロマンチックでもあり、表向きはおしゃれな感じと捉えられがちでしたが、非常に深みのあるプロジェクトでもあったんです。いろんな場所のいろんな方々から手紙が来たんですよ。参加者が3歳から98歳ですから。中でも僕が感動した手紙のひとつが、90歳代のおばあさまからの手紙で、「自分は限界集落みたいなところに住んでいる」と。「周りにも人が住んでなくて、親戚も誰もいなくなって、自分の子供たちもめったに来てくれない」。そんな中で毎週水曜日にうちに投稿してくれてたんですね。その彼女が最後に言ったのが、「この手紙が唯一、私と社会とつながってる証なんです」ということだったんです。それにはちょっと胸を打たれるものがありました。

我々がやっていることは、本当にこの日本に必要なことだと、つまり目もかけられない小さなものに対して、我々は真摯にそこに光をあてたというか、そんな上から目線のことではなく、ちゃんと見つけるっていうか。このプロジェクトの中で我々は届いたものに関しては必ず返事を出す、だからいかなる内容でも拒絶をしない、というルールを決めてたんですよ。

今度また東北で再開局しますけど、東北からの手紙もすごく多くて。これは僕の分析ですが、あの震災以降誰かには伝えたいんだけど知り合いには伝えられない話っていうのが、みなさんあったと思うんですよ。ある種、吐き出すとか言葉にするのに、この水曜日郵便局を利用してくれたんじゃないかなと思っていて。でもそれらの手紙には、露骨に被災地のことは書いてないんですよ。ホントにささやかな日常が書いてあって、そこにはやっぱり被災地と被災地じゃない方々の線引きはないんですよ。ただの日常が書いてあって。でも何か、背景にそういう物語が潜んでいるのは事実ですからね。非常に奥深いというか、多面的なプロジェクトだったと思います。

単純な人と人の交わりや交換というものを生み出しつつ、ある種日本の風土とかを記録し続けたわけですよ。そういった側面もアーカイブとしては持ってますし、アナログ版のソーシャルネットワークですからね。



目指したのは希望を灯す“灯台のような存在“

-----「赤崎水曜日郵便局」「ポイントホープ(※4)」など、発想がものすごくユニークですが、これらのプロジェクトはどのような想いで進められたのでしょうか？

赤崎水曜日郵便局で僕がスタッフに徹底して言い続けたのが、「このプロジェクトに意思はない」ってことです。キャスティングされた作家にとってはかなり厳しいオーダーなんですけど、このプロジェクトでは彼らの個性や作家性はぜんぜん出さない様にしています。

つまりこのプロジェクトはプラットフォーム、しくみであって、それを我々は粛々と運営して、滞りなく皆さんに手紙を届けるっていう役割だけをやっていくことに特化したんですよね。僕と五十嵐氏がよく話したのは、このプロジェクトは基本的に社会にどう発信するかということにおいて、“灯台のような存在でいよう”ということでした。つまり真っ暗な海の中でずっと光を灯し続けてくれている。別にそこに行きなさいって訳でもない、こっちに来いと言ってるわけでもない。でも必ず光を灯していてくれる存在。それが何となくだけ自分の道標になったり、緩やかな関係性としてその先を照らしてくれているという。

そのある種の希望的、そんなにおおげさでない、ささやかな希望のあり方みたいなものを、我々はやっていこう。それを維持しようということが、ひとつのテーマなんです。映画もそうなんですけど、僕は新しい希望のあり方みたいなものをずっとテーマにしてるんですね。赤崎の場合もまさにそうですね、住所の中にある「その先」という言葉が持つささやかな希望を我々は提示する。どんな手紙が送られてきても我々は拒絶しない。必ず書いた方には手紙を送り返す、それを 坦々とやることに特化したわけです。

※4 ポイントホープ 公衆電話を通して、出会ったことのないふたりの女性の物語を鑑賞者が紡ぎ出す体験型のアートプロジェクト。 <https://point-hope.jp/>



----- 先ほどお父様の影響で小さい頃から映画をたくさんご覧になっていたとお聞きしましたが他にはどのような子供時代を過ごされたのでしょうか？

家族環境としては、僕はとても愛されて育った人間だと自覚していて、それはとてもありがたかった。たぶん本当に愛されて生きてきたがゆえに、自分の手に入らないものをテーマにしたいくなっている節もあって。たとえば「何でずっと生と死みたいなものをテーマにしてるんだ」とよく言われるんですけど、やっぱりそれは自分が知ることができなかったがゆえだと思います。もちろんおばあちゃんとか、そういう身近な死というのはありますけど、幼少期から残酷なことだったり辛い体験というのがないぐらい、ありがたい家庭環境と、これは本当に愛されて育てられたというのがあるので、それが自分の作風に反映されてしまってるんだと思います



----- 遠山さんが思う「豊かさ」とは何でしょう？

豊かな状況とは…何でしょうね。まずは、自分が作家としてやりがいを感じる瞬間は、社会に求め

られているって実感したときですね。僕らアーティストとかクリエイターって、自己表現をし続けなきゃいけないですけど、それが本当に社会に求められているかはわからないんですよ。これがすごくコンプレックスである人もいると思うんですけど、でも赤崎水曜日郵便局をやったときに、たぶん参加した作家はみんな感じたと思うんですけど、僕たちはちゃんと求められてるんだって感じられた稀有なケースなんですよ。

作家ってそれを感じることが非常に難しく、映画もそうなんですよね。自分で撮っていてもみんなが分かってくれる訳ないんです。自分が撮ったものを100人に見せたら100人が分かってくれるものはある種つまらない。僕はそういったマイノリティと、そうじゃないものの境がない



状態が、ある種豊かな場になって欲しいと思ってるんですよ。差異がないことっていうか。そういう社会のあり方を、僕は求めているみたいな部分があるかもしれないですね。

これからもずっと、夢を現実に変え続けたい

----- これからの抱負や、今後の夢などを教えてください

僕は幻想を作りだすプロなので、夢を現実に変えることをずっとやり続けたいと思います。人が抱いた、叶わないだろうと思えるような夢を現実に変えてしまう。これはずっとやり続けなきゃいけないくて、映画とかジャンルを問わずなんですよ。アートプロジェクト、文学かもしれないし、政治、経営、マネージメントかもしれないですけど、本当にジャンルを問わないですね。僕がいる場所が僕の最前線なんで。

あと、今後もずっとある程度最前線にはいたいと思います。だんだんいろんな賞を獲ったりディレクターズポジションも増えてくると、最後方になることが多くなる。これはこれで大事で、ケツを持たなきゃいけないから大事なんですけど、現場の最前線が遠くなっていくのはあまりよくないだろうなと思っているので、できるだけ

最前線にい続けたいというのはありますね。

その声とか視線が一番リアルというか、大事な姿勢だと思っているので。



----- 今、興味があるジャンルはありますか？

あるんですよ。僕は最終的に何がやりたいか
というと、庭を作りたいんですね。僕は庭が大

好きで、京都へも毎年庭を巡るために行くんです。つい三週間前も半年ぶりにオフが取れて、北海道の十勝へ行っただですよ。

そこに「十勝千年の森」っていう千年先の森を千年先の人々に託すために一から作っている森があるんです。まあ根気が要る仕事というか、恐ろしいぐらいに時間をかけてやってるんですけど、そこに行きたくて観に行っただですけど、ものすごい感動しましたよ。庭が6つあるんです。

ガーデンデザイナーのダン・ピアソンが設計してるんですけど、デザインが美しくて、さまざまな植物が雑木林のように無作為に育っているように見えて、でも彼は全部設計してるんですね。いろんな植物が入り乱れている姿が本当に美しくて。そこにオノヨーコの作品とかがあるんですよ。東京ドーム85個分の広大な土地に、人間はそのうちのごくわずかな範囲しか入れないんですけど、敷地内に現代アート作品を設置していて。

それを観たくて行っただですよ。それぐらい庭が好きで、僕の中では庭というのは究極の世界観の表れだと思います。特に寺なんて浄土の世界とこの世を石とか苔やらで懇切丁寧に表現してるじゃないですか。あれは究極の世界、究極の作りこみようだと思う。だから、最終的には庭に行き着きたい。

-----「鮫ヶ浦水曜日郵便局(※5)」が開局します。
このプロジェクトについてコメントをお願いします。

この鮫ヶ浦水曜日郵便局との出会いもとても不思議で。赤崎水曜日郵便局は町の3カ年事業でしたから、再開局して欲しいって多くの人からファンレターが来たんですけど、3年で止めざるを得なかったんですね。僕もこの仕組みはプラットフォームとして今の日本に必要なものだと考えていましたので、どこかで再開局したいと思っていました。

ただ水曜日郵便局は、場所がとても重要なわけですね。皆さんが宛先で住所を書くっていうことと、その場所が物語の生まれるスタート地点になりますから。それほど場所が重要なので、いろんな所を巡って探していました。今、僕は宮城大学で教えているので、宮城に行く機会が増えていまして、地元の知り合いに何処か面白いところを教えてくれないかと聞いたときに、今回の鮫ヶ浦って場所を教えたもったんです。

鮫ヶ浦の最大の魅力でありすごさは、人間が手掘りで造った50m近いトンネルなんですよ。軽トラックがぎりぎり通れるぐらいの幅で、照明も何もありません。

実は、この鮫ヶ浦は戦時中「震洋」という特攻艇の基地だったんです。それで、そのトンネルは当時の日本兵が掘ったんですね。鮫ヶ浦の基地は終戦間際の最後の最後に作られたのが幸いして、ここからは出撃することなく、誰ひとり命をなくさずにすんだそうです。



トンネルの入り口



手掘りのトンネル



その後漁港になるんですけど、漁港としての機能も10年前に失っていて、今は完全な廃墟なんです。誰も来ない。地元の人でも行ったことがない。僕は、太平洋が広がるこの場所を訪れて、このトンネルの奥に見えてくる光が何か水曜日郵便局が持つテーマ、その先を静かに照らす灯台とか、その先に希望があるっていう象徴のように思えたんですよね。その時、ここだったら再開局できるんじゃないかと思いました。

あのトンネルはかつて若い兵隊さんが通っていたかもしれないし、いろんな人達が行き交っていたトンネルなんです。そこを、今度は我々が通るわけです。そのことが今回の出会いとして一番強烈で面白かったですね。感動もしたし、衝撃的でもあった。そして、我々はそのトンネルの先に新しい水曜日郵便局を設定して、日本中から人々の想いを集める。

水曜日郵便局では、参加者はみんなそのトンネルの住所を書かなきゃいけません。宮城県東松島市っていう住所を書いていく。そのことが、新しい物語の始まりになるんですね。

※5 鮫ヶ浦水曜日郵便局 2017年12月6日開局。 <https://samegaura-wed-post.jp/>



トンネルを抜けた今は使われていない漁港





----- 今回の開局で、東北地方を選ばれたことに特別な想いがありましたか？

前回の赤崎水曜日郵便局の時に、東北からの手紙が多かったこともあります。そこには伝えたくても伝えることが出来なかった物語もあったんですよ。地域の人達も、これを何か利用してみたい、という感じになって。純粹に来てくれて嬉しいから応援したい、というあの純粹さは、自治体が本当に持てるものなのかって思うぐらいですよ。

開局に向けて毎回出張に行く度に、震災のときの話を皆さんがたくさんされます。そこでは、僕はひたすら聞くことに徹しています。聞くことで自分なりにこのプロジェクトにどう反映して行くか。6年経ったとはいえ、さまざまな思いがまだあるんだなっていうのを、まざまざと経験させてもらっています。

被災地復興支援ですとは、我々一切謳わないんです。でも参加者の皆さんは必ず宮城県東松島市って書かなきゃいけない。この書くっていう行為だけでも、被災地に想いをはせるということにつながる。その接点を持てるということなんだろうなと、今回思っています。



感動はいつも「知ること」から生まれる

----- 最後に、遠山さんにとって「感動」とは、一言でいうとどうなりますか？

知らないことを知ることだと思うんですよ。それが僕は感動の根源だと思いますね。知らない状況だからこそ、次に見えてきたものは知ることですね。それって感動なはずなんですよ。

「私は知らない」というのは、ポーランドのヴィスワヴァ・シンボルスカという、僕が一番好きな詩人の言葉なんですけど、僕はこの言葉をとてとても大事にしています。知らないってことはまだ未経験である、まだ見ぬ世界があるんだってことだと思っています。



ヴィスワヴァ・シンボルスカがノーベル文学賞を受賞したときのスピーチで、「太陽の下ではすべては新しい」って言ったんです。同じことは二度絶対起きません、と。それを僕はとても素敵な言葉だと思っていて、日常の中では同じことだと思っているかもしれないこと、通勤、通学から食事から。でも同じことなんて絶対二度は起きませんよって彼女は言うわけです。つまりそれが毎回の発見であって、感動なのよって。だからこそ、「私は知らない」ってちゃんと言わなきゃいけない。知らないってことは知ることがまだ先にあることだと、僕は常に思っています。

あと知らないってことを認めることですね。僕は常にそれを意識しています。経験が最大の敵だと思っているので。何かが出来たとかやってきたということ、積み重ねはもちろん大事なんですけども、それに頼りすぎてしまうと、知らないことを認めることは出来なくなってしまう。だから、知らないことの中で知って行くこと。旅先なんてそうじゃないですか。それが感動だと思います。

感動とは…

知らないことを
知れること

取材日：2017年11月6日

【インタビュー後記】

とても落ち着いた雰囲気でありながら、内面に熱いエネルギーをたぎらせ、現実を見ながら未来を俯瞰している遠山さんは、問題を提起するアーティストと問題を解決するデザイナーの両面のスキルを持って、プロジェクトを進行している人と言えるでしょう。

理路整然とした思考力と、人の気持ちを豊かに感じる感性の両方、言いかえれば理系と文系の長所を合わせ持つ遠山監督は、これからも独創的なアイディアと切り口で、人と場所を、人と人の想いを紡いで、たくさんの感動を創っていくことと思います。